

ことばから芸術へ (2) — 理論的側面への誘いを授業へ —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉井, 尚彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000294

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



ことばから芸術へ (2)

—理論的側面への誘いを授業へ—

A Linguistic Approach to Artistic Activities (2):

An Introduction of the Theoretical Aspects into Classes

Naohiko Tamai 玉井 尚彦

1. はじめに

「ことば」の研究・教育に携わる一員として、芸術を専攻する学生に長期的な目で見るときどのような貢献が可能か、という問題意識を持って試行錯誤を続けている。現在美術学部で、1回生を主な対象として学術目的の英語使用を念頭に置いた一般英語授業 (Academic English 1) ・2回生以上対象の「原典資料研究」・3回生以上と大学院生を対象とする「テーマ演習 Talking about Art—芸術とは、ことばとは—」(森口サイモン先生と共同担当) ・大学院生対象の「言語表現論特講」といった授業の場を通じて段階的に、「ことば」を考察する要素を含めている。

今回は、特に一般英語授業と原典資料研究を中心に、教材研究を通じた内容構築の観点から論じたい。美術に携わる学生にとって、「ことば」は日常の意思疎通に用いる手段であるのみでなく、作品にタイトルを付ける際・文章に触発されて作品制作に活かす際・作品について語る際など、重要性を発揮する側面が多々存在するはずである。このことを考慮すると、ことばを学問的に捉える言語学という世界に触れる機会が全くないよりも、「そのような考え方の存在」までは知っておくと将来有効に機能する可能性が高い。にもかかわらず、2012年に本学に着任した当初、言語学を活用した授業は開講されていなかった。当初は従来の形の授業を継承する形をとったが、2016年度から段階的に、言語学的な活動を授業の中に導入する試みを行っている。その際、「漠然とした一般的興味を引き出す」段階から「分析的な議論を紹介する」段階に至るまでの中間段階をどのように構成するかが難しい点であると感じている。本年度の場合、前者を一般英語授業の中での取り組みとして、後者を「原典資料研究2—文の世界—」の授業という形で試行することができたので、来年度以降の「原典資料研究1」など、この間に位

置する授業を効果的なものにするための材料が得られたと考えている。

2. こんなことばがあったなら？

—一般英語授業での取り組み—

一般英語授業では学期に1回、ことばについてテーマを設定して5名程度のグループで討論をした上で発表・質疑応答の場を設ける、という機会を、2016年度から継続的に設けている。英語はあくまでひとつの個別言語であり、それを知ることが「ことば」を知ることには貢献することを感得してもらうことが目的である。一般英語授業の中にこの機会を設定するのは一見逆説的かも知れないが、英語を学ぶことが技能面以外にも及ぼし得る効果を含めて長期的な視点をもつとき、有効に機能すると考える。学生の関心の方向を知ること、授業への反映を考える上でも役立つ。

今年度前期は、「英語とは」「日本語とは」「言語とは」といった大まかなテーマを設定して自由な発想を募った。たとえば次のような視点からの答があった。

- ・表記 (アルファベット・漢字などの表すニュアンス)
- ・意味・用法の変化 (例:「かわいい」という単語)
- ・オノマトペ
- ・ことわざの通言語比較
- ・方言、ネットスラング、略語
- ・英語の起源、広がり、未来
- ・ことばと思考 (例:「ことばがなかったらヒトはどのように思考するのか。ひとりだとことばは成り立つのか。」)
- ・ことばと美術 (例:「両者とも人と人をつなぐツールである。話すのが苦手な人でも絵を描けば伝わらと思う。」)

以上のように、「正書法や語法」から「ことばと認知活動・芸術活動との関連」に至るまで、多岐にわたる関心の方向性が確認された。まず正書法や語法に焦点を当てた答では、その変化・多様性に注目したものが多し。歴史的变化 (diachronic variation)、および個別言語間の多様性 (synchronic variation) に着目して、身近な言語現象に目を向けた答であるといえる。ただし、認知活動・芸術活動との関連の方をさらに探りたい学生もいることを考慮し、後期の議論のテーマを選ぶ際、広い解釈が可能なテーマにすることを念頭に置いた。その結果、美術を専攻する学生の創造性を活かしてもらうことを期待し、後期のテーマは「こんなことばがあったなら？」とした。ここでの「ことば」は、「単語」「語句」なども含めた表現面を指すという解釈も、人間言語全体や個別言語のことを指すという解釈も、いずれも許容するものである。ここでは、理論言語学との接点を探る目的から、表現に着目した答を中心に列挙し、分析を試みる。

・合成語

例1: 食品を表す2つの名詞を合成した新語の考案 (寿司+タピオカ→「すしおか」、カレー+シチュー→「カシュー」)¹

例2: オノマトペを含む新語の考案 (例: おつりが全部十円玉でかえってくる→「ツリジャラ」、家を出てからカギや電気が気になる→「追いモヤ」(後からだんだん追って気になって来る)、改札でひっかかる(チャージ不足・エラーなどで)→「改バン」)

・生産的な語尾の拡張可能性

例: 「名詞+る」(グーグル検索をすることを「ググる」というが、他の社名では可能か。また、コンテナから木材(材料)を漁ることについて「テナる」という表現は可能か。)

・対応する語彙的な名詞・動詞が存在しないものに対して答を探る試み

例: (a)「机がガタガタする」/(b)「空腹ではないが何か食べたい、口が寂しいときの気持ち」²/(c)「お姉さんとおばさんの間」

・抽象概念に言及する語彙の通言語差

例1: 感情(「エモい」や、「恋」「愛」を表す表現。日本語には繊細な言葉は多いがフランクな言葉は少ないかも知れない、という意見を導出していた。)

例2: 色(「ブルーな気持ち」を他の色に変えたらどのようなイメージを持つか。例えば「イエローな気持ち」という表現があれば空腹・危険の察知・はっとすること・元気、といった概念を想起する、という答が出た。)³

これらの中には、言語理論との連関を見出すことので

きるものもある。例えば「テナる」という動詞が仮に可能だとすれば、これはコンテナに入れる動作でなくコンテナから出す動作の方に言及することになる。しかし、デフォルト的に想起するのはいずれの解釈か、明確に決まるであろうか。類似する英語の現象に、名詞転成動詞とよばれる、名詞・動詞が同形のケースがある(由本・影山(2011)、杉岡(2019)など)。道具(例: fork(フォークで刺す))、容器(例: bottle(瓶詰めする))、材料(例: butter(バターを塗る))などのケースがあるが、中には除去(例: skin(皮を剥ぐ))のような、確かにその名詞で表される物体の一部に言及はするものの、それを除去するという意味は名詞の語彙的意味からデフォルト的には生じない場合もある。たとえば skin the apple であれば、リンゴは皮を剥いて食べることが多いという語用論的知識に依存するところがある。この語彙的視点と今回の「テナる」の連関から出発して、形態統語論的分析との関係などに話を広げる可能性もあるであろう。⁴

「簡単な言葉で表すことができない内容に対して、それを表す短い表現があれば便利」ということは思い付く人が多かったとみえる。材料はごく身近にあることばでも、分析的な目をもつことで得られる知見が存在すること、さらには言語理論を適用した議論が可能なトピックもあること、という言語学への導入が、学生の創造性を援用してうまくいった試みということができ、得られた知見を来年度以降の一般英語授業や「原典資料研究1」の授業に役立てたいと考える。

3. 文の世界への誘い

—原典資料研究での取り組み—

「原典資料研究」科目は、従来は文字通り、将来美術の原典に接するときを念頭に、美術の内容を扱った文章の読解技術を身に付ける趣旨の科目であった。しかし、「ことばの科学」という世界を学生に提示する場合は意外と提供されていない、という気付きから、2017年度から、言語学の入門的な内容の紹介を読解練習と並行して開始した。2017・2018年度の「原典資料研究1」では、導入として分かり易いように、情報構造や指示・照応などを、談話機能文法の知見(福地(1985)など)を援用しながら紹介した。一方、「原典資料研究2」では、一見「文系的」というイメージを与えやすい「ことば」の世界にも、仮説に基づいた検証という科学と類似した方法論が適用される「理系的」な側面が存在する、ということの紹介を重視している。そのため、敢えて専攻外の人には「マニアック」とも思われるような世界を垣間見てもらう、という方向で授業を行っている。特に、「文」に内在するメカニズムに注意を向ける一助として、生成文法的枠組で

文法現象がどのように捉えられるか、その入門部分を紹介している。ともするとこれは過剰に難しいという反応を学生に引き起こし、却って興味を失わせてしまうというリスクをも内包しているのだが、一方で、美術を専攻する本学部の学生ならではの、意外と知的好奇心を刺激する可能性もあるのではと信じる。「難しすぎて興味が湧かない」手前で止める、しかし単に「ことばとは何となくこのようなもの」という話よりは深いところを探る—といった方針で授業を構成している。

2017年度の「原典資料研究2」受講学生に感想を書いてももらった際、口頭で意見を募るだけでは発言を躊躇するタイプの学生の意見を採り入れられないので、授業で提出物を課して全体の参加を促す機会を作るとよいのでは、という意見があった。これを参考に、今年度は授業内課題を増やした。特に「一般的な興味でも解答可能であるが、その背後に潜む理論的枠組の話に結び付けやすい内容にする」ことを心がけ、大別して次の (I), (II) の2種類の問題を用意した。

(I) 自由な解答が可能な問題の例：

[Q1] 「言語」を「研究」をするには、何が必要だと思いますか？また、その結果として、どのようなことができるようになると思いますか？

[Q1] は、アメリカ言語学会 (Linguistic Society of America) のウェブサイトにある入門者向けの言語学の紹介⁵を題材に、読む前に内容を予測するという導入の一環である。学生の解答例からいくつか抜粋する。⁶

[A1-1] 言語は日常に欠かせないあまりに身近な存在なので、あたりまえのことに気づける力が必要になると思う。 / 言語を研究することによって、言語に限らず身近なあたりまえの事象についてより深く考えることが可能になると思う。

[A1-2] 少なくとも2つ以上の言語を知っていることが必要だと思う。比較が無いと客観ができないので。

[A1-3] 異なる言語を比較すること。差異を検証することで客観的？が生まれるのではないのでしょうか。

[A1-1] は、「言語学専攻でない本学の学生が、言語学の世界を垣間見ることのできる身に付けてほしいか」を的確に把握した答と言える。[A1-2, 3] はまさに比較言語学の観点であると同時に、各個別言語間の差異は表面的なものであってその本質は普遍文法 (Universal Grammar) の考え方の枠組で従来パラメータの値の差に帰着する、という見方 (GB 理論の時代の生成文法 (Chomsky (1981) など)) の導入に通ずる。他にも興味深い答があったが、総じて

「ことばは文化を表し、意思疎通の道具である」という一般によくみられる視点よりも、「ことばはそれ自体でシステムを為しており、それが意思疎通に使われる」という視点に近い答が多いという感想を持った。美術を専攻する学生からこの点を確認できたことは重要な結果であり、ことばへの科学的アプローチを紹介する方向の妥当性を示唆すると思われる。

[Q2] (1) 日本語の古文を学んだとき、どのような「発見」や「驚き」があったか、思い出して記してください。
(2) 現代英語以前の英語を読もうとするとときに直面する「壁」とはどのようなものか、自由に想像して記してください。

[Q2] は、歴史言語学・比較言語学への誘いとして、フランス語・ドイツ語および古英語を題材に動詞の活用語尾を形態統語的観点から考察するための導入として、(1) では既知のものとして日本語の古文を、(2) では未知のものとして昔の英語に対する予測を題材にしている。まず (1) への解答例からみる。

[A2-1] 小さいものを愛でたり、自然の風景にたえて自分の心を表す中にある感性が、今の私たちとも通ずるところがあって、昔の人とつながっている ... ! といった恐さに近い驚きがありました。

[A2-2] 何百年以上も前の日本の人々とは環境から発想まで何もかも違うと思っていたけど、案外今の自分たちと同じようなことを考えているということに気付いた。

[A2-3] 何となくフィーリングで読めるところと、単語でつまづくところがあった。[中略] 古文の授業を通じてはじめて日本語にも「活用形」があることを意識しました。[後略]

[A2-4] 助詞なしで主語と動詞を並べること。例「女御、更衣 (『が』がない) あまた候ひたまひける中に〜」 / 清音だけで、例えば「いろはにほへと」と書いて「いろわにおえど」と読むこと。

感性に訴えたタイプの答 [A2-1, 2] と、言語現象を分析したタイプの答 [A2-3, 4] の両方がみられた。美術を専攻する学生から前者の答が出ることは頷けるが、後者の答も出たことは興味深い (授業での話の方向性も影響しているのかも知れないが)。今年度授業の構成ではこの答を踏まえて、助詞「が」について、上代に主節でなく名詞句の一部に使われた用法 (例:「わが国」「君が行く道」) からの歴史的变化の話題を含めた。今後、実際に古文を観察しながらの発見的作業を含めるのも効果的かも知れない。続いて (2) への解答例を考察する。

[A2-5] 文法がちがう。SVOO とかが整理されてなさそう。gh とか語頭の k を発音してたかもしれない。⁷

[A2-6] そもそも今は使われていない言葉が出てきて何か分からない。文法も違う

[A2-7] 今とはちがう文法が用いられているのでは...? / 同じスペルにもちがう意味の単語がありそう。

[A2-8] 今では消えてしまった意味をもつ言葉がでてくるとき、文脈の解釈や内容理解まで及ばないという壁があるのではないかな、と思います。

[A2-9] 時代特有の言い回しを学ぶ必要がある?

[A2-10] なぜ、現代英語と言われているかを想像すると、矛盾とか難しさがあつたのだろうかと思います。わかりにくかったり、単語不足、無駄な文字とか、言いたいことがうまいこと伝わらない文章だったりするのもかも。

音韻的・統語的な変化を予測した答が多いが、これは歴史言語学への誘いとして、古英語では 3 人称単数以外にも現在形の活用変化があつたこと（さらにそれはドイツ語やフランス語などを学べば出会う現象であること）、また *do-support*⁸ とよばれる操作は中英語 (Middle English) とよばれる時代になって登場したものであること、といった話への導入に用いることができる。

(II) 理論言語学・応用言語学 (言語教育学) の研究で扱われる問題 (の縮小版) を提示して、ことばを理論的枠組の中で分析するためにデータを得ること、仮説を立てて検証することを「疑似体験」する問題の例:⁹

[Q3] 中学生の定期試験の答案で、「自分の日常に関連する内容の英文を書いてください。」という問題に対して、次のような答があつたと考えてみましょう。

- a. I enjoying playing soccer after school every day.
- b. My father always tells me to study.
- c. My mother always give me a glass of juice.
- d. I meeted my cousin yesterday.
- e. (I have a sister. の後で) We often plays tennis on Sunday.

(1) 「1 文あたり 2 点 (部分点あり)」の場合、それぞれの文をどう採点しますか?

(2) 採点にあたって考えた (迷った) ことがあれば、自由に書いてください。

[Q3] は、応用言語学・言語教育学の知見を紹介する導入としての試みである。次のような解答が得られた。¹⁰

[A3-1] (b) 2 点 > (a, c, d, e) 1 点 (2 名)

[A3-2] (a, b, c, e) 2 点 > (d) 1 点 (1 名)

[A3-3] (b) 2 点 > (c, e) 1 点 > (a, d) 0 点 (1 名)

[A3-4] (b, c) 2 点 > (d) 1 点 > (a) 0.5 点 ((e) は無回答) (1 名)

答にばらつきはあるものの、また今後さらにデータを増やす必要はあるが、予備的な結果として観察できる傾向もある。文法的に正しいのは (b) のみであるが、「自分の日常に関連する」という問題文から文法より内容重視の採点をしたためか¹¹、文法的な誤りの種類によらず一定の部分点を与える [A3-1, 2] のタイプの答もあつた。一方 [A3-3, 4] では、述語動詞の時制に関わる誤り (a, d) の方が一致 (特に 3 人称単数現在) に関わる誤り (c, e) よりも低い得点になる傾向が見取れる ([A3-2] の場合も誤って規則変化の過去形を用いた (d) の点数が低いことは興味深い)。しかし、実は幼児言語習得の知見からは、過去形の規則活用語尾 -ed を不規則動詞にも適用する過剰生成の段階の存在が指摘されており、それを考えると「不規則動詞に関する誤りを厳しくみる、という直観的な基準が適切なのかどうか」という議論も生じる、という話 (Foster-Cohen (1999) など参照) を、さらなる考察の参考に紹介した。

[Q4] 次の文について、以下のことを考えてみましょう。

- (i) a. 君は [John が何を買ったと] 思いますか。
- b. 君は [誰が描いた絵] を買うつもりなのですか。
- c. Mary は [John が何をしている時に] 帰ってきたのですか。
- d. John は [コーヒーと何と] を買いに出かけたのですか。

- (ii) a. 何を君は John が買ったと 思いますか。
- b. 誰が君は描いた絵を買うつもりなのですか。
- c. 何を Mary は John がしている時に帰ってきたのですか。
- d. 何と John はコーヒーとを買いに出かけたのですか。

(1) (i) と同じ意図で (ii) のように言うと、各文の容認度はどのようになりますか? { ○ (容認可能) / ? (やや不自然) / ?? (かなり不自然) / * (容認不可能) } の 4 段階で解答してください。^{12, 13}

(2) (i) と同様のテストを英語で作成してください。その際、「(i) を英語に訳す」こととの違いがあれば、それについて簡単に説明してください。

[Q4]は理論言語学でwh移動とよばれる現象であるが、ここでは「ことばに構造があることを、このようなテストを通して検証できることを感じ取ってもらえば」ということを主眼とし、統語派生を厳密に解説することを目的とはしていない。例えば「What did Tom read?」において、readには目的語があるはずで、それはreadの直後にあると考えるのが自然である。しかし表層語順ではそうになっていない。これは「[]を」読むの「[]を」に相当する部分が文頭に移動したと考えると自然である。」という説明でも、wh移動の紹介だけなら事足りる。しかし、敢えてこの一見複雑な課題を考えることで、以下の点を提示することを狙いとした。まず(1)への解答は次のようになった。

[A4-1] (a) ○ > (b, c, d) * (2名)

[A4-2] (a) ○ > (c) ? > (b, d) * (1名)

[A4-3] (a, c) ○ > (b, d) ?? (1名)

[A4-4] (a) ? > (b, c, d) ?? (1名)

[A4-5] (a, c, d) ? > (b) * (1名)

母語の容認度でも判断が分かれることが見て取れるが、これは理論言語学のデータをとる際に例文が複雑化すれば起こり得ることである。この場合も今後さらにデータを増やす必要はあるが、一定の傾向はみられる。例えば、(a)の容認度は全体的に高いが、(c)の容認度にはばらつきがみられる。¹⁴ 両者とも目的語位置からの移動であり、主節からの移動(a)の方が従属節からの移動(c)よりも概ね容認度が高いものの、両者の差が小さい答もみられる(特に[A4-3, 5])。しかし、名詞句内部からの移動(b)・さらに等位構造の一部からの移動(d)の容認度が低い点は全体的に共通しており、この点のコントラストは確認できたといえる。このように、一見ばらつきのあるデータから傾向を見出し、別の文でそれを検証する材料とする、という過程の一部を体験することも、「ことばの科学」という捉え方への違和感を軽減するものと考えられる。また、(2)は難しく感じた人が多かったようなので、授業では要領をつかんでもらうため、(a)と(d)のみ解答を示した((a)はWhat do you think John bought? / (d)は*What did John go to buy coffee and?)。 (d)で[coffee and _____]の一部のみを抜き出すこの操作が文法的に正しくないことは、比較的納得がいくかと思われる。しかし、この正しくない文を作ることも、仮説に基づいた検証を行う上で必要になるものである。言語学を「疑似体験」することでこのことを実感できれば少なくともこの「気付き」が実現すれば、今回の第一の目的は達したといってよいと考える。

以上の他、高校までの英語授業ではおそらく触れる機会が稀である話題として、自動詞の分類(非能格自動詞

と非対格自動詞)、それと関連して主語の動作主性、アスペクト(完了/未完了)、第5文型(SVOC)の一種としての結果構文とよばれる構文、といった話題にも触れたが、過度に専門的にならず興味を持続させるには、さらなる工夫が必要であると感じる。

4. 今後の展望

—ことばを扱う授業全体のカリキュラムへ—

今回、特に「原典資料研究2」では理論言語学の世界で扱われる現象をあえてそのまま(少々ソフトな方向にアレンジはするが)提示する、というアプローチをとってみた。他の学科授業においても、美術の参考文献として英語原典に挑戦したり、科学系の文献を数式などの詳細は理解できなくてもわかる範囲で読み解いたり、といった具合に、敢えて専門的な世界に直接挑戦する機会があるであろう。今回の試みも同様の位置付けとして考えている。尤もそのためには「分からなくても読んでいく」力が必要であり、一般英語授業に確固とした読解力を培う役割が前提としてあることは確かである。従って、一般英語授業では精読にも重点を置きながら、適宜ことばの科学の話題も挟む、そして学期に1回程度、ことばについて考える機会を設ける、といったバランスを心がけている。¹⁵

今回、一般英語授業と原典資料研究2で得られた手応えをヒントに、来年度担当する原典資料研究1を、その間を埋める位置付けとしてどのような内容で構築するか考えることができる。以前の開講時に扱った談話機能文法的な側面以外にも例えば、方言や新語を出発点とした社会言語学的側面や、オノマトペを出発点とした音韻論的側面¹⁶への導入を視野に入れる可能性もあるであろう。

言語学の理論的側面が言語教育にどの程度直接役立つかについては様々な意見があるかも知れないが、活用する道を見出す方向を探っていききたい(藤田・松本・児玉・谷口(編)(2012)など参照)。本学の学科教育の場というのは、自発的な学びを誘発すべく自由な工夫を試み、新たな形を探ることが許される場であると信じている。言語学・英語学専攻でない美術学部の学生の場合でも、知的好奇心を創造に活かす意欲を持った学生の期待に応えるべく、自らの専門分野を活かした授業構成を考案する努力は惜しまない態度で臨みたい。それを分かり易く伝えるための工夫を探り続けたいと考える。

註

1 名詞N1, N2の合成による複合名詞形成においては、修飾関係が生じる場合一方が主要部となる(例えば、「資料研究」の

- 主要部は「資料」でなく「研究」である)。ただし本文中の「カシュー」で学生が想起したのはカレーとシチューが並んでいるものであり、これは修飾関係ではなく並列関係である。並列関係の複合名詞については、たとえば「少年少女」などの例を挙げた研究がある(影山(1993)p.193)。
- 2 「満腹飢舌」という造語案があった。
 - 3 池上(1987)pp.48-53に似た試みへの言及がある。
 - 4 後述の「原典資料研究2」の授業でも少しこの取り組みのための時間をとり、その時は新語・造語に関して詳しい考察ができた。口語で名詞化語尾「～み」が生産的に使われることから音節数との関係に気付き、「音節数が多い語にこの語尾が付く例は思い付くか」という質問をしたところ、「この語尾自体が短く言うためのものなので、音節数が多い語がつくことは不自然になると思う」という、音韻論的分析に結び付ける可能性も示唆する意見があった。
 - 5 アメリカ言語学会 (<https://www.linguisticsociety.org>) による言語学紹介 “Why Major in Linguistics (and what does a linguist do)?” (by Monica Macaulay and Kristen Syrett) (<https://www.linguisticsociety.org/sites/default/files/Why%20Major%20Revised%20%281%29.pdf>)
 - 6 アンケート結果については、誤字脱字と思われる箇所も変更していない。以下同様。
 - 7 caught などの gh、know の語頭の k など、黙字 (silent letter) の例。
 - 8 現代英語において一般動詞を用いた文の yes/no 疑問文を作る際に、主語 - 動詞の順を逆転させるだけでは作ることができず、助動詞 do を用いる、という現象を指す。フランス語やドイツ語ではこの現象はみられない。以下の例を参照。
 - (i) Do you like Peter? / *Like you Peter? (現代英語：*をつけた文は非文法的)
 - (ii) Aimes-tu Pierre? (フランス語)
 - (iii) Liebst du Peter? (ドイツ語)
 - 9 他の例文も提示したが、今回の議論に直接関連する例のみ挙げている。
 - 10 この他に1名、文ごとの答でなく、文法や構造を間違えていたら-2点、スベルミス・ビリオド・大文字表記については各-1点で減点する、という趣旨の解答があった。
 - 11 実際、[A3-1]の答のうち1名から、問題(2)で「1点：言いたいことはわかるがスベルミス等がある」という記述があった。
 - 12 実験のデザインにあたり、上山(2019)を参照した。
 - 13 文法性 (grammaticality) と容認可能性 (acceptability) は必ず

しも一致しない。たとえば、Colorless green ideas sleep furiously. という文は、文法的であるが、意味を考えると容認可能ではない。このことは授業で触れたが、どの観点で答えてほしいか再度明確にした方がよかったかとも思う。

- 14 人によっては、「日常会話で使う文としての自然さ」という基準を重視したために全体的に容認度を低く判定した可能性もある。特に [A4-4] は、この点を考慮すれば [A4-1] と同傾向の答とみなせる。
- 15 今回はアウトプットの側面(書く・話す)について論じなかったが、今年度のテーマ演習では、芸術とことばの関連について英語でコミュニケーションをとる貴重な機会を持つことができた。2019年7月18日の授業で、本学ギャラリー@KCUAでの申請展「蒸化(ディスティレ)」(2019年7月27日～8月18日)のために来日していた Sandra Binion 氏・Lou Mallozzi 氏をゲストにお招きして、英語で芸術について会話をする機会を設け、質問を準備してきた積極的な学生もみられた。有意義な機会を提供してくださったお二人と柏木加代子先生(本学美術学部名誉教授)に感謝申し上げます。
- 16 この側面については、2014年度の総合基礎実技で、実技との有機的連関を探った。

参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Foster-Cohen, Susan (1999) *An Introduction to Child Language Development*. Harlow: Addison Wesley Longman. (『子供は言語をどう獲得するのか』今井邦彦訳(2001). 東京: 岩波書店.)
- 藤田耕司・松本マサミ・児玉一宏・谷口一美(編)(2012)『最新言語理論を英語教育に応用する』東京: 開拓社.
- 福地肇(1985)『談話の構造』東京: 大修館書店.
- 池上嘉彦(1987)『ふしぎなことば ことばのふしぎ』東京: 筑摩書房.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 杉岡洋子(2019)「新しい動詞の作られ方:『ググる』と『映(ば)える』」, 窪菌晴夫(編著)『よくわかる言語学』pp.54-55. 京都: ミネルヴァ書房.
- 上山あゆみ(2019)「移動の制約:『今度はコーヒーと何を注文しようか?』」, 窪菌晴夫(編著)『よくわかる言語学』pp.92-93. 京都: ミネルヴァ書房.
- 由本陽子・影山太郎(2011)「名詞が動詞に変わるとき」, 影山太郎(編)『日英対照 名詞の意味と構文』pp.178-208. 東京: 大修館書店.